

海外の畜産物の需給動向

牛肉

米国

第1四半期の牛肉輸出は過去最高を記録

韓国・中国向け輸出が好調

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2022年3月の牛肉輸出量は13万7772トン（前年同月比1.2%増）と引き続き前年同月を上回った（表）。これにより、22年第1四半期の輸出量は38万3649トン（前年同期比6.2%増）となった。

米国食肉輸出連合会（USMEF）は、第1四半期の輸出先首位となった韓国向け輸出量の伸びを、同国内における小売需要の増加が要因としている。また、中国向け輸出量も同61.8%増と大幅に増加し、日本やメキシコ向けなどの減少を相殺した形となった。中

国向けについてUSMEFは、3月末から上海で行われたロックダウンにより4月以降の輸出実績に影響が出てくるとしている。

一方でUSDAは、台湾や中南米および中東地域など比較的輸出規模が小さい市場の経済や観光業の回復が輸出量の増加を後押ししており、主要輸出国のみならず広範囲な輸出先での米国産牛肉需要の増加が好調な輸出に寄与しているとしている。

フィードロット飼養頭数は引き続き高水準

USDA全国農業統計局（NASS）によると、2022年4月のフィードロット導入頭数は

表 輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

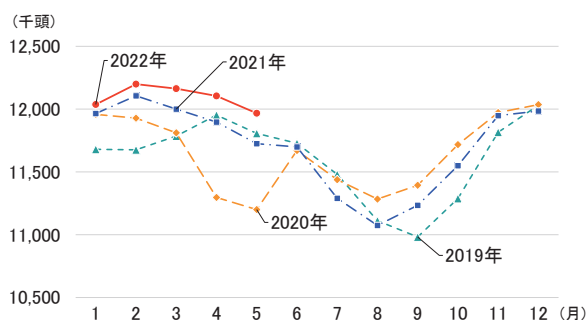
	2021年 3月	2022年 3月	前年同月比 (増減率)	シェア	2022年 (1～3月)	
					前年同期比 (増減率)	
韓国	30,193	33,208	10.0%	24.1%	94,738	8.2%
日本	34,345	30,943	▲9.9%	22.5%	84,368	▲7.4%
中国	19,562	24,502	25.3%	17.8%	65,969	61.8%
カナダ	9,654	11,080	14.8%	8.0%	29,606	▲0.4%
メキシコ	13,013	10,254	▲21.2%	7.4%	29,869	▲24.3%
台湾	6,920	8,660	25.1%	6.3%	25,760	45.5%
その他	22,420	19,125	▲14.7%	13.9%	53,339	▲2.8%
合計	136,109	137,772	1.2%	100.0%	383,649	6.2%

資料：USDA [Livestock and Meat International Trade Data]

注：枝肉重量ベース。

180万9000頭（前年同月比0.9%減）、出荷頭数は189万3000頭（同2.2%減）といずれも減少した。この結果、22年5月1日時点のフィードロット飼養頭数は1196万7000頭（同2.1%増）となり、引き続き高い水準を維持している（図1）。

図1 フィードロット飼養頭数の推移

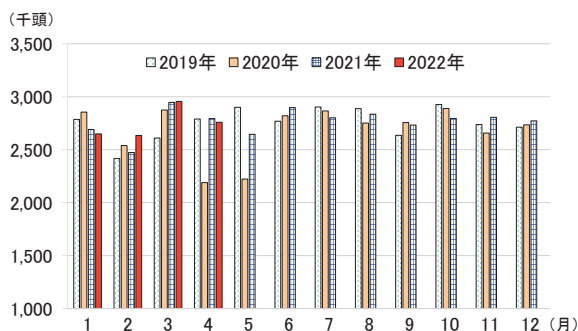


資料：USDA「Cattle on Feed」
 注1：1000頭以上規模のフィードロットが対象。
 注2：各月1日時点。

USDA/NASSによると、22年4月の牛と畜頭数は275万8500頭（同1.3%減）となった（図2）。これは、干ばつのため肉用経産牛のと畜頭数は引き続き多いものの、全体の8割弱を占めるフィードロット出荷頭数の減少が要因として大きいと考えられる。

しかし、高水準のフィードロット飼養頭数と2、3月のと畜頭数が多かったことで、USDAは22年の牛肉の生産量予測を上方修

図2 牛と畜頭数の推移



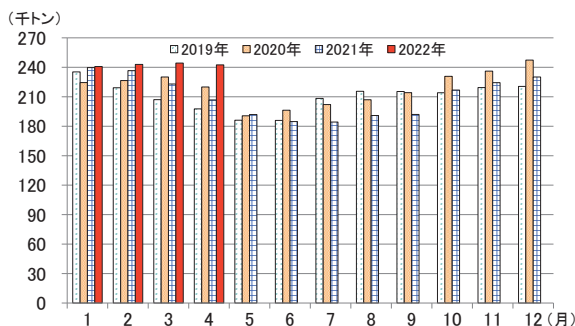
資料：USDA「Livestock Slaughter」
 注：連邦検査ベース。

正した。ただし、23年は牛の供給が減少すると見込まれることから、牛肉生産量は22年よりも減少すると予測している。

肉用経産牛と畜の増加で、期末在庫量は大幅増

2022年4月の牛肉の期末在庫量は24万2500トン（前年同月比17.3%増）と大幅に増加した（図3）。例年では春に牛肉在庫は減少するが、今年はその傾向が見られない。現地報道によると、骨なし牛肉の在庫量が多く、その半分以上は肉用牛繁殖経営の多い米国南部の西側の地域であることから、これら地域での干ばつにより1～4月の肉用経産牛のと畜頭数が増えたことが在庫増の一因としている。また、太平洋側の地域の在庫が増加しているのは、アジア向け輸出の増加によるものと分析している。

図3 牛肉在庫量の推移



資料：USDA「Cold Storage」
 注：各月末在庫。

（調査情報部 上村 照子）

牛肉輸出量は低迷も、中国向けは比較的堅調

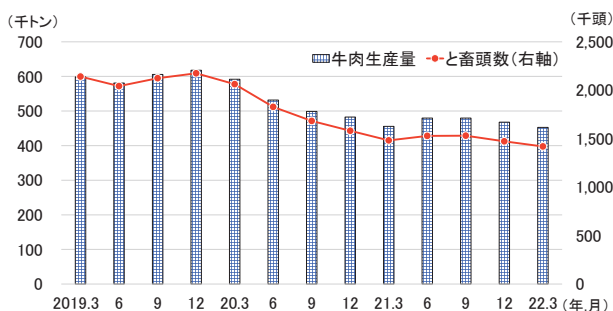
雌牛のと畜頭数割合が減少

豪州統計局（ABS）が2022年5月に公表した統計によると、同年1～3月期の牛と畜頭数は142万頭（前年同期比4.2%減）とやや減少しており、牛肉生産量も45万2700トン（同0.6%減）とわずかに減少した（図1）。牛肉生産量の減少率がと畜頭数より緩やかなのは、1頭当たりの平均枝肉重量が増加していることによるもので、豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）によると、牛価格の上昇を背景に生産者が増体を図る傾向にあることや、フィードロットから出荷される牛の割合が増加したことが要因としている。

なお、豪州フィードロット協会（ALFA）によると、同期のフィードロット飼養頭数は、126万9927頭と過去最高を記録しており、フィードロットの稼働率も85.5%と高い水準になっている（注1）。

（注1） 海外情報「フィードロット飼養頭数および収容可能頭数、過去最高に（豪州）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003267.html）を参照されたい。

図1 牛肉生産量およびと畜頭数の推移



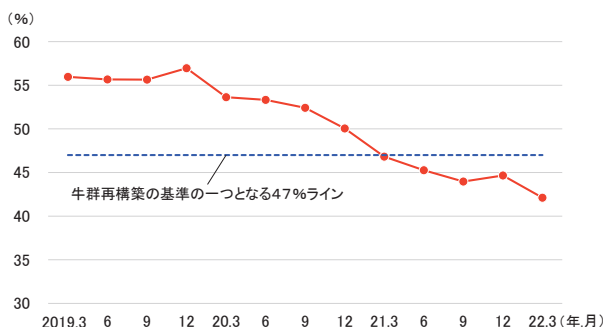
資料：ABS
注1：四半期ごとの数値。
注2：生産量は枝肉重量ベース。

他方、豪州の牛群の動向を示す指標である、と畜頭数全体に占める雌牛の割合「FSR」^(注2)を見ると、22年3月は42.1%と、前回公表（21年12月）の44.7%から2.6ポイント低下している（図2）。

MLAによると、現状では牛群再構築は継続されているものの、今後、ラニーニャ現象が終息し、干ばつのサイクルに入れば一気にと畜が進み、牛肉生産量は増加するとしている。

（注2） 同値が47%を超えた場合には牛群が縮小に向かうとされ、47%以下の場合、牛群が再構築段階に入るとされている。

図2 雌牛と畜割合（FSR）の推移



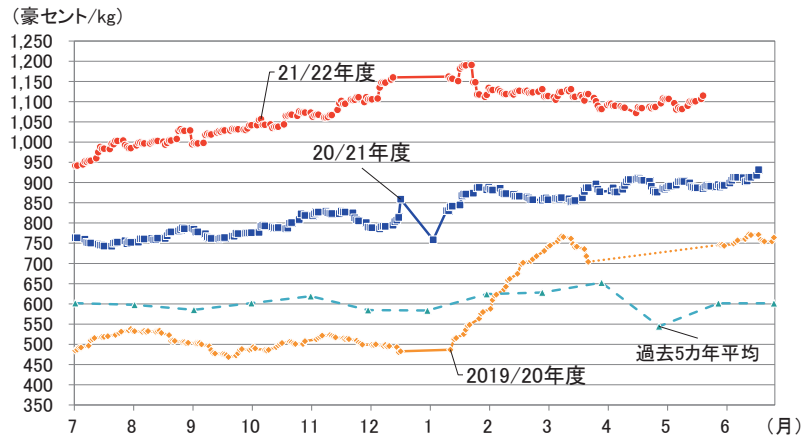
資料：ABS
注：四半期ごとの数値。

肉牛価格は引き続き高値安定

肉牛生体取引価格の指標となる東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は1キログラム当たり1100豪セント（1033円：1豪ドル=93.95円^(注3)）前後で推移しており、2022年5月24日時点で同1115豪セント（1048円）と、引き続き高値安定の相場が続いている（図3）。

（注3） 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

図3 EYCI価格の推移



資料：MLA

注1：年度は7月～翌6月。

注2：東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、東部3州（クイーンズランド州、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州）の主要家畜市場における若齢牛の加重平均取引価格で、家畜取引の指標となる価格。肥育牛や経産牛価格とも相関関係にある。

注3：2020年3月26日～6月1日の間は、新型コロナウイルス感染症の影響でEYCI価格の集計を実施していない。

中国向け輸出は比較的堅調に推移

豪州農業・水・環境省（DAWE）によると、2022年4月の牛肉輸出量は6万1705トン（前年同月比14.9%減）とかなり大きく減少

した（表）。現地報道によると、4月は豪州の祝祭日が多く、食肉処理施設の稼働日数が他の月よりも少ないため、例年、生産量・輸出量ともに減少する月であるとしている。その一方で、21年は豪中貿易摩擦の影響で振るわ

表 輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

	2021年 4月	2022年 4月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～4月)	
				前年同期比 (増減率)	
日本	18,476	13,867	▲ 24.9%	60,396	▲ 12.5%
中国	10,820	11,730	8.4%	45,523	▲ 2.3%
韓国	14,470	10,658	▲ 26.3%	43,697	▲ 13.8%
米国	11,989	9,929	▲ 17.2%	36,854	▲ 11.2%
東南アジア	8,569	6,917	▲ 19.3%	24,040	▲ 25.9%
中東	2,322	1,659	▲ 28.6%	6,096	▲ 40.6%
EU	761	688	▲ 9.6%	2,350	▲ 17.7%
その他	5,094	6,257	22.8%	19,972	5.1%
輸出量合計	72,502	61,705	▲ 14.9%	238,927	▲ 12.3%

資料：DAWE

注1：船積重量ベース。

注2：東南アジアは、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアの合計。

注3：中東は、イラン、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、サウジアラビア、クウェート、バーレーン、カタール、オマーン、イエメン、エジプト、パレスチナ自治区、アラブ首長国連邦を構成する七つの首長国のうち四つの首長国（アブダビ、ドバイ、フジャイラ、ラース・アル＝ハイマ）の合計。

なかった中国向けは1万1730トン（同8.4%増）とかなりの程度増加しており、上海のロックダウンなど新型コロナウイルス感染症

（COVID-19）による影響を考慮しても、比較的堅調に推移したとしている。

（調査情報部 国際調査グループ）

中国

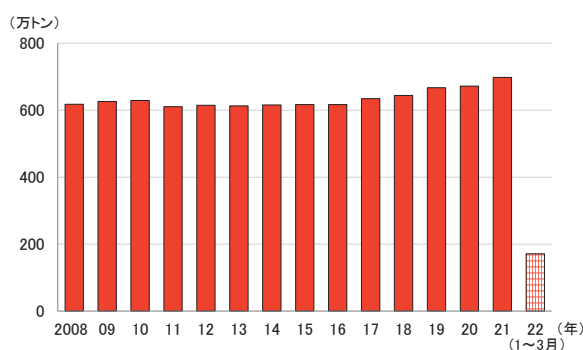
牛肉生産量は増加傾向も、引き続き高値で推移

牛肉生産量は22年も増産の見込み

中国国家统计局によると、2021年の牛肉生産量は飼養頭数や枝肉重量の増加などから前年比3.7%増の698万トンとなった（図1）。また、22年1～3月期の生産量は、前年同期比3.6%増の171万トンとなった。

中国農業農村部が4月に公表した「中国農業展望報告（2022—31）」（以下「展望報告」という）によると、品種改良や家畜伝染病の予防・管理の強化などにより22年の牛肉生産量は710万トン（前年比1.7%増）としている。

図1 牛肉生産量の推移



資料：中国国家统计局

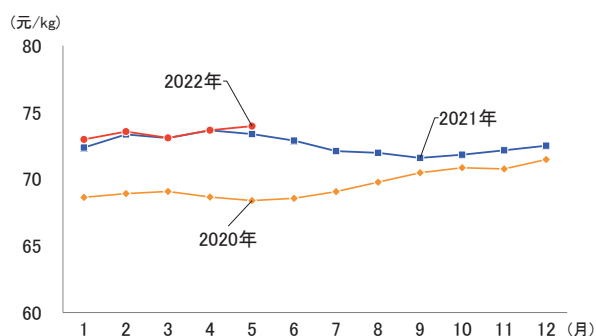
牛肉価格は引き続き高値で推移

牛肉卸売価格は、需要の拡大や飼料価格高騰などの影響で2019年後半以降、高値で推移しており、22年5月には1キログラム当たり74.0元（1442円：1元＝19.48円^{（注）}）となった（図2）。

展望報告によると、22年も堅調な需要と飼料価格の高騰が見込まれることなどから、同価格は引き続き高値で推移するとされている。ただし、豚肉価格が低下していることなどから、大幅に上昇する可能性は低いとしている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

図2 牛肉卸売価格の推移



資料：中国商務部

牛肉輸入量は22年も増加見込み

中国では牛肉生産の拡大が図られているが、高まる需要に追い付かず牛肉輸入量は増加傾向で推移しており、2021年の牛肉輸入量は、冷凍・冷蔵ともかなりの程度増加した（表1、2）。輸入先別の動きを見ると、豪州が大幅に減少した一方で、米国、ロシア、ウルグアイなどが大幅に増加した。この要因について、現地専門家は、中豪間の貿易摩擦の影響で輸入先を他国にシフトする動きが見られたことや、米国国内で

中国向け輸出認定を受けた食肉処理加工施設が増加したことを挙げている。

22年1～4月の牛肉輸入実績を見ると、冷凍はかなり大きく減少した一方、冷蔵は大幅に増加した。COVID-19の影響は受けつつも需要は底堅いとされる中で、冷凍牛肉の輸入量が減少した要因として、現地専門家は、牛肉価格の国際的な上昇により中国国内の輸入意欲が一

時的に低下したこと、また、中国国内でのCOVID-19再拡大の影響により、一部港湾施設で特に冷凍品の通関が遅れがちであったことを挙げている。なお、世界最大の国際貿易港を管理する上海海関総署（日本でいう税関）によると、3月末から実施された上海のロックダウン中も税関業務への制限はなかったが、業務人員の不足や物流・輸送力の低下から、通関や搬

表1 冷凍牛肉の輸入先別輸入量の推移

(単位：千トン)

	2018年	2019年	2020年	2021年	前年比	2022年 (1～4月)	前年同期比
					(増減率)		(増減率)
ブラジル	322.7	399.6	848.5	858.5	1.2%	207.5	▲33.7%
アルゼンチン	180.4	375.5	481.1	461.7	▲4.0%	134.2	▲24.4%
ウルグアイ	218.6	285.7	228.4	352.9	54.5%	134.1	22.5%
ニュージーランド	107.6	205.2	160.9	191.7	19.1%	67.8	▲5.9%
豪州	160.5	279.7	220.4	138.6	▲37.1%	46.5	▲10.6%
米国	6.7	9.0	24.6	130.7	430.7% (約5.3倍)	42.6	62.8%
その他	27.0	67.3	106.2	145.2	36.7%	51.0	28.4%
合計	1,023.4	1,622.0	2,070.1	2,279.3	10.1%	683.8	▲13.4%

資料：「Global Trade Atlas」

注1：製品重量ベース。

注2：HSコード0202。

表2 冷蔵牛肉の輸入先別輸入量の推移

(単位：千トン)

	2018年	2019年	2020年	2021年	前年比	2022年 (1～4月)	前年同期比
					(増減率)		(増減率)
豪州	12.6	27.5	33.4	24.2	▲27.4%	8.2	15.6%
米国	0.2	0.9	3.5	13.2	273.7% (約3.7倍)	5.9	97.5%
ニュージーランド	3.2	9.2	8.9	10.1	13.3%	3.5	12.4%
アルゼンチン	—	0.07	1.5	3.5	132.6% (約2.3倍)	0.8	▲18.9%
ウルグアイ	—	0.08	1.3	2.3	77.1%	0.06	▲94.0%
ロシア	—	—	0.01	0.2	1542.9% (約16.4倍)	0.03	▲46.2%
その他	0.01	0.1	0.07	0.01	▲89.2%	0.00	▲100.0%
合計	16.0	37.9	48.7	53.6	10.0%	18.5	20.7%

資料：「Global Trade Atlas」

注1：製品重量ベース。

注2：HSコード0201。

出に時間を要する傾向があったとされている。
 展望報告によると、22年も国内の供給量では
 需要を十分に満たすことができないことなどが

ら、牛肉輸入量は引き続き増加するとされてい
 る。
 (調査情報部 阿南 小有里)

豚 肉

E U

2月の豚肉生産量は前年同月比3.7%減

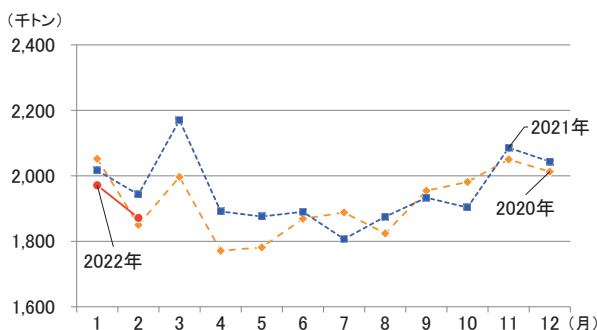
スペインの豚肉生産量、主要生産国 の中で唯一前年同月を上回る

欧州委員会によると、2022年2月の豚肉
 生産量（EU27カ国）は、前年同月比3.7%
 減の187万1560トンとなった（図1、表）。
 2月は、1頭当たりの枝肉重量が94.8キロ
 グラム（同1.2%減）、と畜頭数が1974万頭
 （同2.5%減）といずれも下回ったことが生
 産減に影響した。

同月の生産量を主要生産国別に見ると、
 21年にEU最大の豚肉生産国となったスペイ

ンは同3.8%増と好調な生産が続いている。
 一方で、第2位のドイツ（同11.0%減）を

図1 月別豚肉生産量の推移



資料：欧州委員会「Eurostat」

注1：直近月は速報値。

注2：枝肉重量ベース。

表 主要生産国別豚肉生産量の推移

(単位：千トン)

	2021年 2月	2022年 2月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1~2月)	
				前年同期比 (増減率)	
スペイン	445	462	3.8%	956	6.0%
ドイツ	417	371	▲ 11.0%	755	▲ 11.3%
フランス	176	173	▲ 1.5%	360	▲ 0.9%
ポーランド	156	150	▲ 3.7%	303	▲ 7.5%
デンマーク	149	143	▲ 4.1%	305	0.2%
オランダ	142	139	▲ 2.0%	283	▲ 2.2%
イタリア	110	102	▲ 6.9%	207	▲ 7.4%
その他	348	331	▲ 4.9%	675	▲ 3.5%
合計	1,943	1,872	▲ 3.7%	3,843	▲ 2.9%

資料：欧州委員会「Eurostat」

注1：速報値。

注2：枝肉重量ベース。

はじめ、フランス（同1.5%減）、ポーランド（同3.7%減）、デンマーク（同4.1%減）、オランダ（同2.0%減）、イタリア（同6.9%減）など、スペイン以外の主要生産国は軒並み前年同月を下回った。

欧州委員会が4月5日に公表した短期的需給見通しによると、21年後半からの生産コストの増加や豚枝肉卸売価格の低迷による収益性の悪化が繁殖母豚の減少を招いたとしている。また、飼料価格の上昇により、飼料コストを抑えるため、通常より短い肥育期間でと畜され、枝肉重量の低下が想定されることから、22年の豚肉生産量は2290万4961トン（前年比3.0%減）と減少が見込まれている。

豚枝肉卸売価格は5月に入り、下落に転じる

欧州委員会によると、2022年4月の豚枝肉卸売価格（EU27カ国）は、前年同月比21.9%高の100キログラム当たり190.75ユーロ（2万6564円：1ユーロ＝139.26円^{（注1）}）となった（図2）。

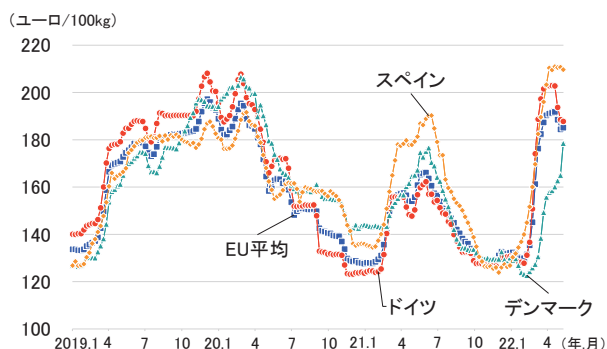
同価格の推移を週ごとに見ると、同年2月の第4週以降から上昇傾向で推移し、4月に入ると同190ユーロを超える水準に達した。しかし、5月に入ると下落に転じ直近の5月16日の週は同185.17ユーロ（2万5787円）となった。

なお、3月25日から4月29日まで実施された豚肉の民間在庫補助^{（注2）}の累計申請数量は4万7541トンとなり、そのうち、約6割の2万7695トンが60日の保管期間で申請されている。そのため、今後、保管されていた豚肉が順次市場に放出されることになる。一方で、現地報道によると、消費者が食料やエネルギー価格などの上昇に直面しているため、需要期の夏に向けた例年のような価格上昇は見込まれないとしている。豚肉生産量が減少する中で、同価格の反発は不透明な状況にあり、今後の動きが注目されている。

（注1） 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

（注2） 海外情報「欧州委員会、豚肉の民間在庫補助実施を発表（EU）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003227.html）を参照されたい。

図2 豚枝肉卸売価格の週別推移



資料：欧州委員会「Meat Market Observatory-Pigmeat」

注1：EU参考価格（CLASS E）。

注2：デンマークの2020年2月17日はデータなし。

（調査情報部 小林 智也）

2021年豚肉輸出量は4年ぶりに減少に転じる

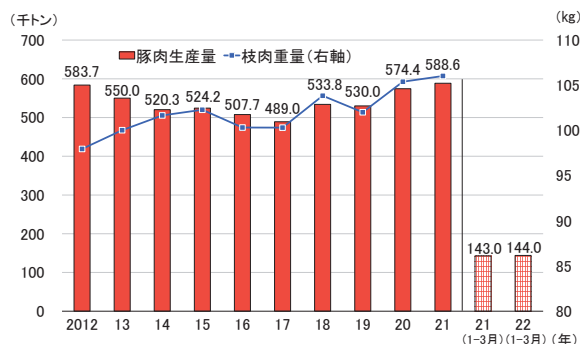
22年1～3月豚肉生産量は増加傾向で推移

チリ農業省農業政策・調査局（ODEPA）によると、2021年の豚肉生産量は、58万8580トン（前年比2.5%増）と前年をわずかに上回り、2年連続で増加した（図）。また、22年1～3月は14万3955トン（前年同期比0.7%増）と引き続き増加傾向で推移している。

チリの豚肉生産量は、13年3月に環境問題から大規模農場（母豚飼養頭数15万頭）が閉鎖されるなど、17年まで減少傾向で推移した。しかし、18年以降は養豚企業による繁殖成績や飼料要求率の改善、種豚の遺伝的改良など、生産の効率化や平均枝肉重量の増加により生産量は増加傾向で推移している。平均枝肉重量^{（注1）}は、17年の100.3キログラムから21年には106.0キログラムとこの間に5.7キログラム（5.7%）増加した。

（注1） 枝肉重量には頭部と皮を含む。

図 豚肉生産量および平均枝肉重量の推移



資料：ODEPA
注：枝肉重量ベース。

21年の豚肉輸出量は、中国での豚肉需給の緩和により4年ぶりに減少

2021年の豚肉輸出量（冷蔵・冷凍）^{（注2）}は、20万9310トン（前年比9.9%減）と前年をかなりの程度下回った（表）。豚肉輸出量は18～20年に3年連続で過去最高を更新したが、4年ぶりに減少した。全体の約6割を占める中国向けが、同国での豚肉需給の緩和により21年5月以降減少傾向となり、年間で大幅に減少（同22.9%減）したことが要因である。

また、22年1～3月の豚肉輸出量は、3万8889トン（前年同期比28.5%減）と減少傾向が続いている。このうち中国向けは、1万5877トンと前年同期を6割程度下回り、21年5月以降11カ月連続で前年同月を下回っている。輸出単価についても、同国での豚肉需給の緩和基調を反映して前年同期の半額程度となった。中国に次ぐ韓国向けの輸出量は、同51.7%増と前年同期を上回った一方、日本向けは、同14.9%減と下回った。このほか、コロンビア、コスタリカ、ペルーといった中南米向けが大幅に増加している。

一方、21年の豚肉輸入量は、14万2861トン（前年比38.7%増）と前年を大幅に上回った。8月以降、COVID-19対策の規制緩和や政府支援策による消費者の購買力回復などが、豚肉需要の回復につながったとみられる。22年1～3月の輸入量は、輸出が大幅に減少したことなどから1万9944トン（前年同期比49.0%減）とほぼ半減している。

表 豚肉輸出の推移

区分	2021年			2021年（1～3月）			2022年（1～3月）					
	輸出量 （トン）	輸出額 （千米ドル）	単価 （米ドル/トン）	輸出量 （トン）	輸出額 （千米ドル）	単価 （米ドル/トン）	輸出量 （トン）	輸出額 （千米ドル）	単価 （米ドル/トン）	前年同期比（増減率）		
										輸出量	輸出額	単価
中国	130,355	328,249	2,518	40,154	116,301	2,896	15,877	22,746	1,433	▲ 60.5%	▲ 80.4%	▲ 50.5%
韓国	28,083	144,802	5,156	5,814	27,720	4,768	8,818	44,938	5,096	51.7%	62.1%	6.9%
日本	27,106	130,481	4,814	5,938	30,901	5,204	5,056	110,746	21,904	▲ 14.9%	258.4%	320.9%
コロンビア	10,747	24,649	2,294	708	1,049	1,482	4,055	8,548	2,108	472.7% （約5.7倍）	714.7%	42.2%
コスタリカ	3,448	10,374	3,009	263	867	3,297	1,654	4,461	2,697	528.9% （約6.3倍）	414.4%	▲ 18.2%
その他	9,571	31,793	3,322	1,514	5,251	3,468	3,429	10,683	3,116	126.5%	103.5%	▲ 10.2%
合計	209,310	670,347	3,203	54,391	182,088	3,348	38,889	202,122	5,197	▲ 28.5%	11.0%	55.3%

資料：ODEPA

注1：HSコード0203。

注2：製品重量ベース。

（注2）チリの豚肉輸出量および輸入量は、ほとんどが冷凍品である。

ム当たり0.85米ドル（110円：1米ドル＝129.21円^{（注3）}）と前年同期比49.1%安と大幅に低下した。

肉豚生産者販売価格は大幅に低下

国内需要は回復傾向にあるものの、輸出需要の低下を受けて、肉豚の生産者販売価格は低下傾向で推移している。2022年1～4月の肉豚の平均生産者販売価格は、1キログラ

（注3）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」2022年5月末TTS相場。

（調査情報部 井田 俊二）

鶏肉

米国

国内の需要増により鶏肉価格は大幅上昇

鶏肉生産量はわずかに増加

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2021年の米国の処理羽数は92億1100万羽（前年比0.2%減）となった（表1）。一方で、生体重量が1羽当たり2.93キログラム（同0.8%増）と微増だったことから、鶏肉生産量は2036万6000トン（同0.7%増）となった。

また、22年1～4月の生産量、処理羽数

および生体重量は、いずれも前年同期比増で推移している。現在、米国の一部地域で高病原性鳥インフルエンザが発生しているものの、ブロイラー肉の生産・輸出の多いジョージア州、アラバマ州およびアーカンソー州での発生が報告されていないため、ブロイラー産業への影響は小さいとされている。鶏肉価格が堅調に推移していることから、USDAは22年の鶏肉生産量の予測を上方修正し、さらに23年も増加傾向で推移するとしている。

表1 鶏肉生産量の推移

	2021年 (1～12月)		2022年 4月		2022年 (1～4月)	
	生産量	前年比 (増減率)	生産量	前年同月比 (増減率)	生産量	前年同期比 (増減率)
生産量 (千トン)	20,366	0.7%	1,616	2.7%	6,682	1.0%
処理羽数 (百万羽)	9,211	▲0.2%	738	1.3%	3,033	0.5%
生体重量 (キログラム/羽)	2.93	0.8%	2.90	1.3%	2.92	0.4%

資料：USDA「Livestock & Meat Domestic Data」

注1：連邦食肉検査済みのもの。

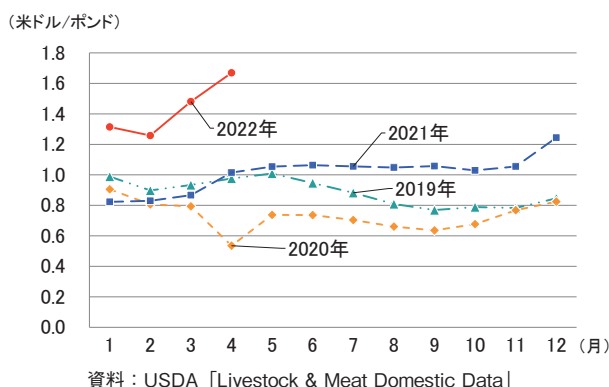
注2：生産量は可食処理ベース（骨付き）。

卸売価格は大幅に上昇

USDA/ERSによると、2022年4月の鶏肉卸売価格は1ポンド当たり1.67米ドル（1キログラム当たり475.40円：1米ドル＝129.21円^{（注）}、前年同月比64.4%高）と大幅に上昇した（図1）。21年4月から同価格は13カ月連続で前年同月を大きく上回って推移している。現地情報によると、インフレにより食品価格が上昇している中で、外食産業などでは安価な鶏肉の提供が大幅に増えており、供給が追い付いていないことが要因とされている。USDAは、直近の価格動向と旺盛な需要への期待から22年の同価格の予測を上方修正した。

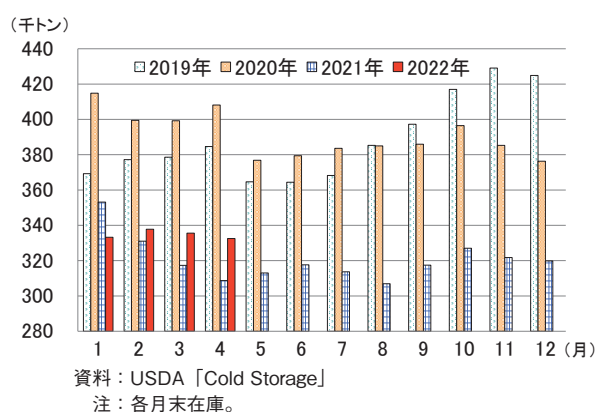
（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

図1 鶏肉の卸売価格の推移



22年4月の鶏肉冷凍在庫量は、33万2520トン（前年同月比7.7%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。21年の鶏肉の冷凍在庫量は総じて低水準で推移したが、22年に入り2月から3カ月連続で前年同月を上回る水準が続いている。

図2 鶏肉冷凍在庫量の推移



第1四半期の輸出量はわずかに増加

USDA/ERSによると、2022年第1四半期（1～3月）の輸出量は前年同期比0.7%増となった（表2）。フィリピン、ベトナム向けなどが大幅に減少したが、台湾、カナダ、グアテマラ、南アフリカ向けの増加がこれを相殺する形となっている。一方で、22年3月の米国の鶏肉輸出量は29万6529トン（前年同月比1.1%減）と旺盛な国内需要を背景にわずかに減少しており、USDAは22年の輸出量の予測を下方修正した。

表2 輸出先別鶏肉輸出量の推移

(単位：トン)

	2021年 3月	2022年 3月	前年同月比 (増減率)	シェア	2022年 (1～3月)	
					前年同月比 (増減率)	前年同月比 (増減率)
メキシコ	69,593	58,366	▲16.1%	19.7%	178,358	▲0.9%
キューバ	32,755	29,182	▲10.9%	9.8%	79,334	0.5%
台湾	13,852	18,634	34.5%	6.3%	60,171	36.8%
カナダ	12,658	17,076	34.9%	5.8%	40,854	17.6%
フィリピン	21,998	15,744	▲28.4%	5.3%	37,138	▲25.9%
中国	17,483	14,474	▲17.2%	4.9%	51,137	▲0.5%
グアテマラ	13,090	12,798	▲2.2%	4.3%	37,088	9.6%
南アフリカ	7,547	12,207	61.7%	4.1%	24,243	14.6%
ベトナム	7,798	9,622	23.4%	3.2%	19,672	▲35.6%
その他	103,183	108,426	5.1%	36.6%	318,572	0.7%
合計	299,956	296,529	▲1.1%	100.0%	846,567	0.7%

資料：USDA [Livestock and Meat International Trade Data]

注1：製品重量ベース。

注2：もみじ（鶏足）を除く。

(調査情報部 上村 照子)

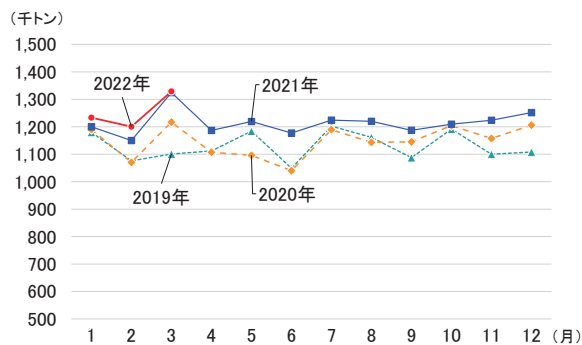
ブラジル

鶏肉生産量、海外からの堅調な需要を背景に引き続き増加傾向で推移

2022年1～3月の鶏肉生産量、前年同期比2.4%増

ブラジル地理統計院（IBGE）によると、2022年1～3月の鶏肉生産量は376万2000トン（前年同期比2.4%増）と前年同期をわずかに上回った。同国の鶏肉生産量は19年以降、増加傾向が続いている（図1）。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：IBGE

インフレによる国内消費の停滞や生産コスト増による収益性の低下があるものの、海外からの堅調な需要が要因とみられる。

22年1～4月の鶏肉輸出量、輸出競合国の供給制限を背景に増加

ブラジル経済省貿易事務局（SECEX）によると、2022年1～4月の鶏肉輸出量は141万3977トン（前年同期比8.0%増）と前年同期をかなりの程度上回った（表）。米ドルに対するレアル安の為替相場のほか、アジア、EUおよび北米などにおける高病原性鳥インフルエンザの発生やウクライナ情勢の影響により輸出競合国からの鶏肉供給が制限されたためとみられる。

輸出先別に見ると、最大の中国向けは19万7011トン（同2.9%減）と前年同期をわ

表 輸出先別鶏肉輸出量および輸出額の推移

区分	2021年（1～4月）			2022年（1～4月）			前年同期比（増減率）		
	輸出量 （トン）	輸出額 （千米ドル）	単価 （米ドル/トン）	輸出量 （トン）	輸出額 （千米ドル）	単価 （米ドル/トン）	輸出量	輸出額	単価
中国	202,816	373,567	1,842	197,011	407,897	2,070	▲2.9%	9.2%	12.4%
アラブ首長国連邦	91,106	143,185	1,572	164,304	318,820	1,940	80.3%	122.7%	23.5%
日本	128,801	232,982	1,809	128,657	267,987	2,083	▲0.1%	15.0%	15.2%
南アフリカ共和国	104,490	61,472	588	119,739	85,480	714	14.6%	39.1%	21.3%
サウジアラビア	159,738	273,651	1,713	87,285	199,159	2,282	▲45.4%	▲27.2%	33.2%
フィリピン	42,971	35,476	826	70,255	73,397	1,045	63.5%	106.9%	26.5%
メキシコ	25,221	30,922	1,226	58,570	139,272	2,378	132.2%	350.4% (約4.5倍)	93.9%
韓国	33,967	56,965	1,677	51,012	101,861	1,997	50.2%	78.8%	19.1%
その他	520,641	733,721	1,409	537,144	942,192	1,754	3.2%	28.4%	24.5%
合計	1,309,751	1,941,942	1,483	1,413,977	2,536,066	1,794	8.0%	30.6%	21.0%

資料：SECEX

注1：HSコード0207.11、0207.12、0207.13、0207.14の合計。

注2：製品重量ベース。

ずかに下回った。しかしながら、輸出競合国である米国およびタイなどからの供給が制限され、ブラジルにとっては追い風になるとみられる。サウジアラビア向けは8万7285トン（同45.4%減）と大幅に減少した。これは21年5月、ブラジル産輸入鶏肉でサルモネラ汚染が確認されたとしてブラジルの鶏肉処理場（11カ所）からの輸入が停止されたためである。一方、同じ中東のアラブ首長国連邦向けは16万4304トン（同80.3%増）と大幅に増加した。サウジアラビア向けの一部が同国に仕向けられたとみられる。また、日本向けは12万8657トン（同0.1%減）と前年同期並みとなった。

鶏肉卸売価格は22年2月ごろから上昇に転じ高値で推移

サンパウロ大学農学部応用経済研究所（CEPEA）によると、ブラジルの鶏肉卸売価格（サンパウロ州、名目価格）は、国内外からの堅調な需要を背景に20年5月ごろから上昇傾向で推移し、21年9月中旬には統計が公表された04年以降で最高値となる1

キログラム当たり8.57レアル（223円：1レアル＝26.02円^(注)）を記録した（図2）。その後は価格高騰から需要が減退し、21年10月以降、価格は下落傾向に転じた。しかし、22年2月ごろからは、ウクライナ情勢や米国での高病原性鳥インフルエンザの発生などによる輸出競合国の供給制限や生産コストの上昇を反映して価格は再び上昇に転じ、5月中旬には同7.65レアル（199円）となっている。

図2 サンパウロ州の鶏肉卸売価格（丸鶏・冷蔵）の日別の推移



資料：CEPEA

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

(調査情報部 井田 俊二)

牛乳・乳製品

米 国

乳価は記録的高水準、好調な乳製品の輸出

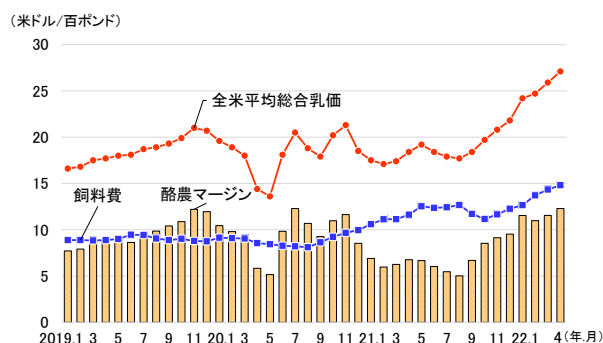
乳価は引き続き上昇傾向で推移

米国農務省（USDA）によると、2022年4月の全米平均総合乳価は、生乳100ポンド当たり27.1米ドル（1キログラム当たり77.02円：1米ドル＝129.21円^{（注1）}、前年同月比47.3%高）と国内外からの堅調な需要を背景に27米ドルを越える記録的水準となった（図1）。また、穀物相場の上昇から飼料コストが増加している中で、同月の酪農マージン^{（注2）}も、前年同月比81.5%増の同12.29米ドル（同34.93円）と増加している。

（注1） 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均為替相場」の2022年5月末TTS相場。

（注2） 酪農家のセーフティネット制度である酪農マージン保障プログラム（DMC）で算定される全米平均総合乳価と飼料費の差額としての収益。DMCでは、酪農マージンが発動基準を下回った場合、補填^{てんぽん}が発動される。

図1 酪農マージンの推移

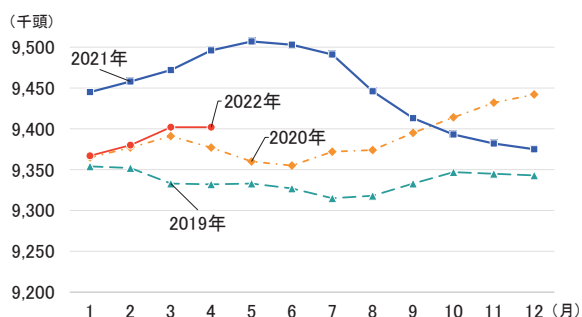


資料：USDA

乳用経産牛飼養頭数・生乳生産量ともに前年同月比減

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2022年4月の乳用経産牛飼養頭数は、前年同月比1.0%減の94万2000頭となった（図2）。

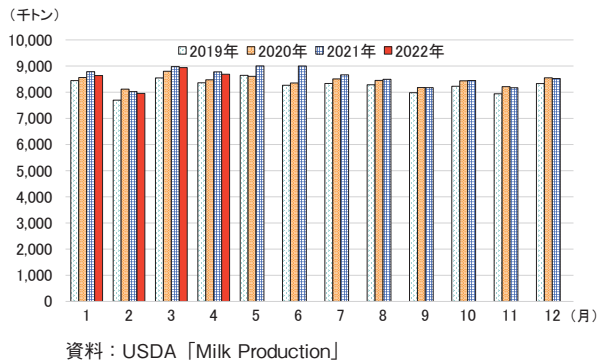
図2 乳用経産牛飼養頭数の推移



資料：USDA/NASS「Milk Production」

記録的な乳価の上昇により、酪農家の増頭意欲が高まっているとみられ、飼養頭数は22年1月を底に拡大に転じているが、飼料価格が依然として上昇しているほか、インフレによる生産コストの上昇や労働力不足により増頭の伸びに歯止めがかかっている。この結果、4月の生乳生産量は、同1.0%減の868万6000トンとなった（図3）。

図3 生乳生産量の推移



乳製品の輸出量は好調に増加

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2022年3月の乳製品輸出量は、脱脂粉乳とホエイが前年同月比で減少したものの、バターやチーズの大幅な伸びから乳製品全体としては好調に推移している（表）。

品目別に見ると、バターは国際価格が上昇する中で、米国産が相対的に安価となったことからカナダ向けが好調となるなど6100ト

ン（前年同月比47.5%増）と大幅に増加した。このため、22年第1四半期は1万4700トン（前年同期比41.1%増）と四半期としては14年第2四半期以来の高水準を記録した。

チーズは、メキシコ、韓国向けが好調なことにより、22年3月は4万1700トン（前年同月比12.9%増）となった。特にメキシコ向けについては、外食や観光需要の回復により大幅に増加した。

一方、ホエイは1万9600トン（同17.9%減）と大幅に減少したものの、タンパク質濃縮ホエイ（WPC）は1万5300トン（同13.7%増）とかなり大きく増加した。

アメリカ乳製品輸出協会（USDEC）によると、今後、生乳の供給不足、国内需要の高まりによる輸出の制約、物流の停滞、価格の高騰による国外の低所得層消費者の購買意欲の低下が輸出の伸びに影響を及ぼすとしている。

表 主要乳製品輸出量の推移

（単位：千トン）

	2021年 3月	2022年 3月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～3月)	
				前年同期比 (増減率)	
脱脂粉乳	86.5	80.1	▲7.4%	202.9	▲8.2%
チーズ	36.9	41.7	12.9%	104.0	12.7%
ホエイ	23.9	19.6	▲17.9%	46.5	▲23.4%
WPC	13.4	15.3	13.7%	38.4	1.5%
バター	4.2	6.1	47.5%	14.7	41.1%

資料：USDA「Dairy Data」
注：製品重量ベース。

（調査情報部 伊藤 瑞基）

2022年第1四半期の乳製品の輸出量は前年同期比減

第1四半期の生乳出荷量、前年同期並み

欧州委員会によると、2022年3月の生乳出荷量（EU27カ国）は、1270万4920トン（前年同月比0.5%減）と前年同月をわずかに下回った（表1）。

同月の生乳出荷量を国別に見ると、ポーラ

ンド（同1.8%増）、イタリア（同2.9%増）などが前年同月を上回った一方で、上位3カ国のドイツ（同1.4%減）、フランス（同1.2%減）、オランダ（同2.5%減）はいずれも前年同月を下回った。また、22年第1四半期（1～3月）の生乳出荷量は前年同期並みの3539万7520トン（前年同期比0.0%減）となった（図1）。

表1 主要生産国別生乳出荷量の推移

（単位：千トン）

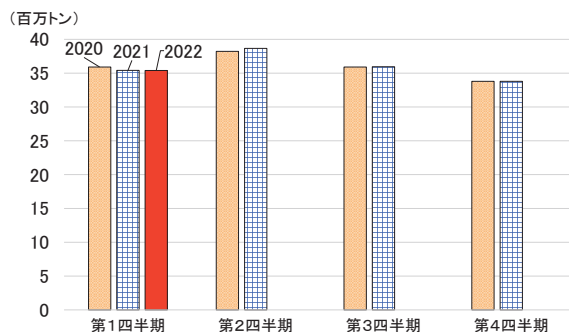
	2021年 3月	2022年 3月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～3月)	
				前年同月比 (増減率)	前年同月比 (増減率)
ドイツ	2,819	2,778	▲ 1.4%	7,938	▲ 1.4%
フランス	2,193	2,166	▲ 1.2%	6,161	▲ 1.2%
オランダ	1,215	1,185	▲ 2.5%	3,406	▲ 2.3%
ポーランド	1,098	1,118	▲ 1.8%	3,202	▲ 2.9%
イタリア	1,085	1,116	▲ 2.9%	3,242	▲ 3.1%
アイルランド	854	833	▲ 2.5%	1,400	▲ 0.4%
スペイン	661	651	▲ 1.6%	1,867	▲ 0.2%
デンマーク	482	485	▲ 0.6%	1,400	▲ 0.9%
ベルギー	388	389	▲ 0.3%	1,116	▲ 1.0%
その他	1,978	1,984	▲ 0.3%	5,667	▲ 0.7%
合計	12,773	12,705	▲ 0.5%	35,398	▲ 0.0%

資料：欧州委員会「Eurostat」

注1：速報値。

注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

図1 四半期ごとの生乳出荷量の推移



資料：欧州委員会「Eurostat」

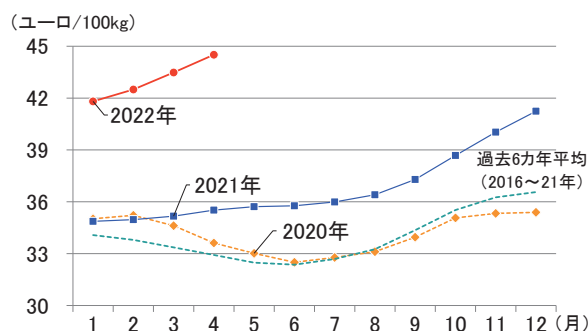
注1：速報値。

注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

今後、飼料価格の上昇に伴い乳牛への飼料給与量の減少が見込まれており、乳脂肪分の減少などからチーズやバターなど乳製品生産への影響も懸念されている。

こうした状況の中、EUの生乳取引価格は上昇基調にある。欧州委員会によると、22年4月の生乳取引価格（EU27カ国の平均）は、100キログラム当たり44.51ユーロ（6198円：1ユーロ＝139.26円^注）、前年同月比25.3%高）と3カ月連続で過去最高値を更新した（図2）。

図2 生乳取引価格の推移



資料：欧州委員会「Milk market observatory」
 注1：直近月は推定値。
 注2：データが未公表のルクセンブルグを除く。

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

第1四半期の脱脂粉乳の輸出量、前年同期比大幅減

欧州委員会によると、2022年第1四半期（1～3月）の英国を除くEU域外向けの乳製品輸出量は、脱脂粉乳が前年同期比22.5%

減の15万6018トン、チーズが同2.2%減の22万8905トン、全粉乳が同14.7%減の6万1171トン、バターが同5.5%減の4万3300トンといずれも前年同期を下回った（表2）。

EUの乳製品価格は、生乳価格や製造コスト（エネルギー価格）などの上昇もあり、いずれも高水準で推移するなど輸出市場での価格競争力が低下している。加えて、EUの生乳出荷量が減少傾向で推移する中で、乳製品生産量も前年同期を下回っていることも、輸出量減少の一因とみられる。

なお、チーズの輸出量について、最大の輸出先である米国向けのみが前年同期を上回った。EUと米国との間で貿易紛争となっていた航空機補助金をめぐる追加関税措置が21年3月に解除されて以来、米国向けのチーズ輸出量は増加傾向で推移している。

表2 主な乳製品の輸出量（英国を除く）の推移

（単位：千トン）

輸出先	脱脂粉乳			輸出先	チーズ			輸出先	全粉乳			輸出先	バター		
	2021年 (1～3月)	2022年 (1～3月)	前年比 (増減率)		2021年 (1～3月)	2022年 (1～3月)	前年比 (増減率)		2021年 (1～3月)	2022年 (1～3月)	前年比 (増減率)		2021年 (1～3月)	2022年 (1～3月)	前年比 (増減率)
中国	26	18	▲31.9%	米国	26	29	▲13.2%	オマーン	15	16	8.4%	米国	7	7	0.4%
インドネシア	18	16	▲12.0%	日本	28	26	▲6.1%	中国	4	6	32.3%	中国	5	4	▲28.2%
アルジェリア	23	14	▲41.3%	スイス	19	17	▲8.7%	セネガル	2	3	39.4%	韓国	2	3	70.7%
エジプト	14	12	▲11.4%	サウジアラビア	13	12	▲4.9%	ドミニカ共和国	2	2	▲0.2%	インドネシア	1	2	122.5%
イエメン	12	9	▲24.6%	韓国	13	12	▲4.7%	カメルーン	1	2	72.4%	サウジアラビア	3	2	▲13.2%
その他	109	88	▲19.1%	その他	136	132	▲2.9%	その他	47	33	▲31.2%	その他	28	24	▲12.0%
合計 (英国を除く)	201	156	▲22.5%	合計 (英国を除く)	234	229	▲2.2%	合計 (英国を除く)	72	61	▲14.7%	合計 (英国を除く)	46	43	▲5.5%

資料：欧州委員会「Milk market observatory」

（調査情報部 小林 智也）

牧草の生育不良により新シーズンの生乳生産も低調の見通し

4月の生乳生産量、9カ月連続で前年同月を下回る

ニュージーランド乳業協会（DCANZ）によると、2022年4月の生乳生産量は142万9400トン（前年同月比5.6%減）と9カ月連続で前年同月を下回った（図1）。また、21/22年度（6月～翌5月）の4月までの累計でも、2048万2900トン（前年同期比4.1%減）と減少した。

ニュージーランド証券取引所（NZX）によると、国内の主産地で乾燥による牧草の生育不良が見られ、今期の生乳生産量は前年度

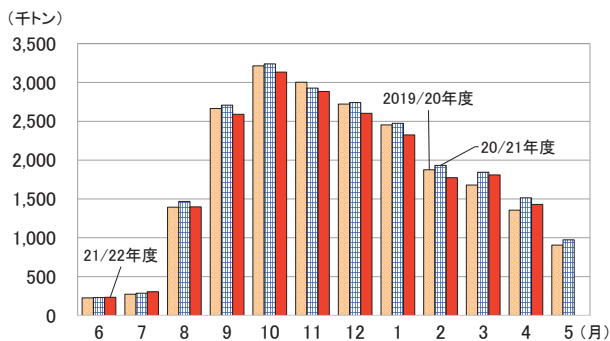
割れが確定的とし、来期（22/23年度）にも不調を引きずるとしている。

このような中で、同国最大手のフォンテラ社は5月26日、来期の当初乳価（平均額）について、生乳の固形分^{（注1）}1キログラム当たり9.00NZドル（772円：1NZドル＝85.77円^{（注2）}）と発表した。今期に次ぐ高い乳価水準となることについて同社のハレル最高経営責任者は、「世界的な供給不足に加え、乳製品への継続的な需要を反映している」とコメントしている。

（注1） 乳脂肪分および乳たんぱく質。

（注2） 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

図1 生乳生産量の推移



資料：DCANZ

注：年度は6月～翌5月。

乳製品輸出量、主要2品目が前年同月を大幅に上回る

ニュージーランド統計局（Stats NZ）によると、2022年4月の乳製品輸出量は、全粉乳を除く主要3品目が前年同月を上回った（表、図2）。

品目別に見ると、脱脂粉乳は東南アジア向けなどの大幅増が寄与し、全体で大幅に増加

表 乳製品輸出量の推移

（単位：トン）

品目	2021年 4月	2022年 4月	前年同月比 （増減率）	2021/22年度 7月～翌4月	
				前年同月比 （増減率）	前年同月比 （増減率）
脱脂粉乳	21,288	25,944	21.9 %	284,427	6.1 %
全粉乳	130,488	112,164	▲ 14.0 %	1,247,043	▲ 8.3 %
バターおよびバターオイル	28,476	34,501	21.2 %	335,022	▲ 4.0 %
チーズ	28,420	30,218	6.3 %	295,216	0.1 %

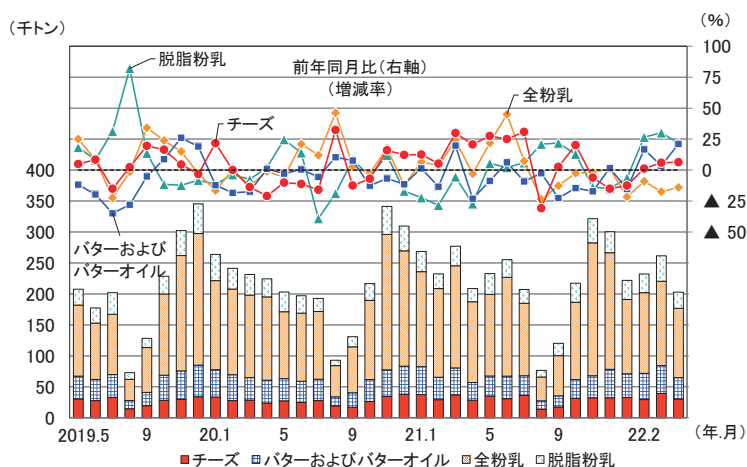
資料：Stats NZ

注1：HSコードは、脱脂粉乳が0402.10、全粉乳が0402.21と0402.29、バターおよびバターオイルが0405.10と0405.90、チーズが0406。

注2：製品重量ベース。

注3：年度は7月～翌6月。

図2 乳製品輸出量および前年同月比（増減率）の推移



資料：Stats NZ
注：製品重量ベース。

した。全粉乳は最大輸出先の中国向けが前年同月比で4割程度減少したことを受けて、全体でもかなり大きく減少した。バターおよびバターオイルは、最大輸出先の中国向けのほか、米国向けなどの大幅増により、全体でも大幅に増加した。チーズは、最大輸出先の中国向けの大幅増により、全体でかなりの程度増加した。

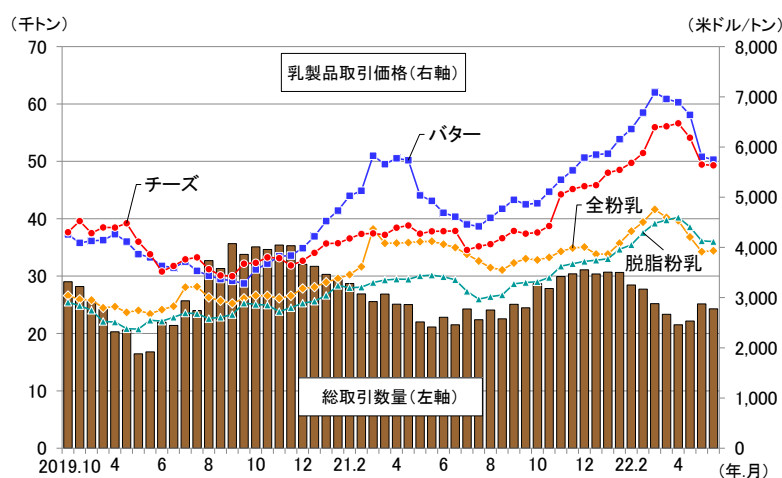
GDT価格は、全粉乳を除く主要3品目が前回並み

2022年5月17日に開催されたGDT^(注3)

の平均取引価格は、全粉乳を除く主要3品目が前回並みとなった(図3)。

品目別に見ると、脱脂粉乳は北アジア^(注4)や中東からの需要が落ち着いたことなどから前回並みとなった。全粉乳は北アジアや東南アジアからの堅調な需要を受けてわずかに上昇した。一方、バターは北アジアや北米からの引き合いが強かったものの、取引量が伸びなかったことで前回並みとなった。また、チーズも同様に、中東からの引き合いが強かったものの、前回並みとなった。

図3 GDTの乳製品取引価格と総取引数量の推移



資料：GDT

(注3) グローバルデイリートレード。月2回開催されるフォンテラ社主催の電子オークションで、当該価格は乳製品の国際価格の指標とされている。

(注4) ニュージーランド外務貿易省は、中国、日本、香港、韓国、台湾を北アジアとしている。

(調査情報部 廣田 李花子)

中国

生乳生産量は増加、乳製品輸入量は大幅減

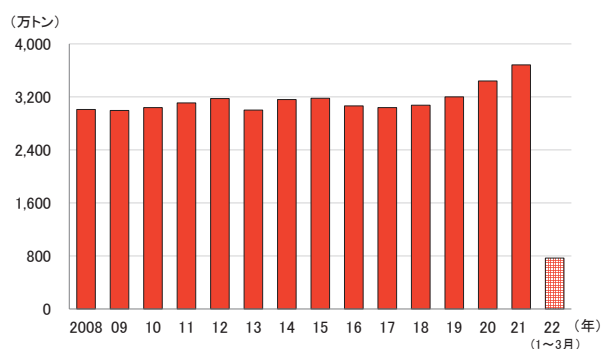
生乳生産量は引き続き増加

中国国家统计局によると、2022年1～3月期の生乳生産量は、前年同期比8.3%増の768万トンとなった(図1)。

中国農業農村部が4月に公表した「中国農業展望報告(2022—31)」(以下「展望報告」という)によると、1頭当たり乳量の増加などから22年の生乳等生産量(注1)は、3979万トン(前年比5.4%増)になるとしている。

(注1) 牛由来の生乳のほか、ヤギやヤクなど由来の乳を含む生産量。

図1 生乳生産量の推移



資料：中国国家统计局、中国乳業年鑑

生乳価格は緩やかに下落も引き続き高値で推移

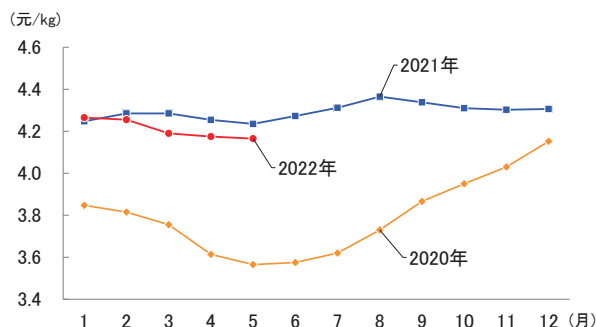
2022年に入ってから生乳価格は緩やかな下落傾向にあり、同年5月には1キログラム当たり4.16元(81円：1元=19.48円(注2))

となった(図2)。22年で最も対前月比の下落率が大きかった3月は、一大消費地である上海などがCOVID-19により都市封鎖(ロックダウン)された時期と重なるが、従来、中国の生乳価格は、需要期である春節(1月後半から2月)に向けて上昇しその後下降するという季節変動が見られるため、現地専門家からは、この価格動向とロックダウンを直結して捉えるべきではないとの意見もある。

なお、展望報告によると、飼料価格の高止まりによる生産コスト高と乳製品の国際価格の高騰などから、22年の生乳価格も引き続き高値で推移するとされている。

(注2) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

図2 生乳価格の推移



資料：中国農業農村部

注：主要10省・自治区(全国の生乳生産量の8割以上を占める)の農家庭先価格の平均。

乳製品輸入量は多くの品目で大幅減

中国の乳製品輸入量は、国内の旺盛な需要にけん引され増加傾向で推移してきたが、2022年1～4月の主要乳製品輸入量を見ると、大半の品目で大幅に減少した（表）。

この要因について現地報道では、前年同期の輸入実績が非常に大きかったことのほか、国内の生乳生産量の増加、乳製品の国際価格の高騰、COVID-19に起因する需要低下などが挙げられている。また、最も下落率の大きいホエイについて現地専門家からは、国内の豚価格低迷による飼料用需要減少のほか、国内の新生児数減少に伴い、育児用調製粉乳

の生産量が減少しており、その原料となるホエイの需要が減少していることが挙げられている。さらに、外食産業での消費割合が高いといわれるチーズについては、国内でのCOVID-19再拡大やそれに伴うロックダウンなどによりレストランなどの営業停止が相次いだことで、輸入需要が減少しているとみられる。

なお、展望報告によると、国際価格の上昇などのマイナス要因はあるが、生乳の需給ギャップは引き続き解消されないため、増加率は落ち着くものの、22年の輸入量も引き続き増加が見込まれている。

表 主な乳製品の品目別輸入数量の推移

(単位：万トン)

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年 (1～4月)	前年同期比 (増減率)
全粉乳	52.1	67.1	64.4	84.9	41.9	6.9%
脱脂粉乳	28.0	34.4	33.6	42.6	12.4	▲20.0%
飲用乳	54.4	72.9	84.5	99.6	26.3	▲19.5%
ヨーグルト	2.7	3.2	2.8	2.5	0.9	—
チーズ	10.8	11.5	12.9	17.6	5.1	▲22.4%
バター	8.7	6.2	8.6	9.7	4.3	3.2%
育児用調製粉乳	33.3	35.6	34.8	27.3	8.0	▲5.8%
ホエイ	55.5	45.1	62.3	71.8	15.3	▲42.7%

資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは、全粉乳が0402.21と0402.29、脱脂粉乳が0402.10、飲用乳が0401.10と0401.20、ヨーグルトが0403.10（2021年まで）と0403.20（22年）、チーズが0406、バターが0405.10、育児用調整粉乳が1901.10、ホエイが0404.10。なお、ヨーグルトは、22年1月1日のHS品目表の改訂により、市場実態に合わせてヨーグルトの範囲が拡大されたため、22年とそれ以前のデータに連続性はない。

(調査情報部 阿南 小有里)

飼料穀物

世界

2022/23年度の世界のトウモロコシ生産量、わずかに減少見込み

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年5月12日、22/23年度最初の世界のトウモロコシ需給予測値を公表した（表）。

これによると、同年度の世界のトウモロコシ生産量は11億8072万トン（前年度比2.9%減）と過去最高となった前年度の生産量をわずかに下回ると見込まれている。国別に見ると、ブラジル（1億2600万トン、同8.6%増）、アルゼンチン（5500万トン、同3.8%増）などで増加する一方、米国（3億6730万トン、同4.3%減）、中国（2億7100万トン、同0.6%減）およびロシアによる侵攻を受けるウクライナ（1950万トン、同53.7%減）などの減少が世界の生産量に影響するとみられる。

輸出量は、世界全体で1億8270万トン（同7.6%減）と前年度からかなりの程度減少が見込まれている。国別に見ると、アルゼンチン（4100万トン、同5.1%増）とブラジル（4700万トン、同5.6%増）でやや増加するものの、ウクライナ（900万トン、同

60.9%減）の大幅な減少が世界全体の輸出入量の減少の主な要因となっている。

輸入量は、世界全体で1億7684万トン（同2.3%減）と前年度からわずかに減少する見込みである。世界最大の輸入国である中国（1800万トン、同21.7%減）は、ウクライナからの輸入が減少することから前年度を大幅に下回ると見込まれているほか、カナダ、EU、ブラジル、英国でも同様に減少する見込みである。

消費量は、世界全体で11億8497万トン（同1.2%減）と前年度からわずかに減少する見込みである。国別に見ると、ブラジル（7700万トン、同5.5%増）、アルゼンチン（1400万トン、同2.2%増）および中国（2億9500万トン、同1.4%増）などで増加する一方、米国（3億901万トン、同2.2%減）やウクライナ（920万トン、同30.3%減）などで減少が見込まれている。

この結果、期末在庫は3億513万トン（同1.4%減）と前年度をわずかに下回ると見込まれている。

表 主要国のトウモロコシの需給見通し（2022年5月12日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区 分	2020/21年度	2021/22年度	2022/23年度	
		（推計値）	（5月予測）	前年度比 （増減率）
米国				
期首在庫	48.76	31.36	36.57	16.6%
生産量	358.45	383.94	367.30	▲ 4.3%
輸入量	0.62	0.64	0.64	0.0%
消費量	306.54	315.86	309.01	▲ 2.2%
輸出量	69.92	63.50	60.96	▲ 4.0%
期末在庫	31.36	36.57	34.54	▲ 5.6%
アルゼンチン				
期首在庫	3.62	1.18	1.49	26.3%
生産量	52.00	53.00	55.00	3.8%
輸入量	0.01	0.01	0.01	0.0%
消費量	13.50	13.70	14.00	2.2%
輸出量	40.94	39.00	41.00	5.1%
期末在庫	1.18	1.49	1.49	0.0%
ブラジル				
期首在庫	5.33	4.15	4.65	12.0%
生産量	87.00	116.00	126.00	8.6%
輸入量	2.85	2.00	1.30	▲ 35.0%
消費量	70.00	73.00	77.00	5.5%
輸出量	21.02	44.50	47.00	5.6%
期末在庫	4.15	4.65	7.95	71.0%
ウクライナ				
期首在庫	1.48	0.83	6.77	8.2倍
生産量	30.30	42.13	19.50	▲ 53.7%
輸入量	0.02	0.02	0.00	-
消費量	7.10	13.20	9.20	▲ 30.3%
輸出量	23.86	23.00	9.00	▲ 60.9%
期末在庫	0.83	6.77	8.07	19.2%
中国				
期首在庫	200.53	205.70	210.24	2.2%
生産量	260.67	272.55	271.00	▲ 0.6%
輸入量	29.51	23.00	18.00	▲ 21.7%
消費量	285.00	291.00	295.00	1.4%
輸出量	0.00	0.02	0.02	0.0%
期末在庫	205.70	210.24	204.22	▲ 2.9%
世界計				
期首在庫	307.46	293.17	309.39	5.5%
生産量	1,129.00	1,215.62	1,180.72	▲ 2.9%
輸入量	185.61	180.99	176.84	▲ 2.3%
消費量	1,143.29	1,199.40	1,184.97	▲ 1.2%
輸出量	182.97	197.79	182.70	▲ 7.6%
期末在庫	293.17	309.39	305.13	▲ 1.4%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注：各国の穀物年度 世界、米国：9月～翌8月/中国、ウクライナ：10月～翌9月/アルゼンチン、ブラジル：3月～翌2月。

（調査情報部 針ヶ谷 敦子）

南米の生産回復などから 大豆の生産量、輸出量はともに増加見込み

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年5月12日、22/23年度最初の世界の大豆需給予測値を公表した（表）。

これによると、同年度の世界の大豆生産量は3億9469万トン（前年度比13.0%増）とかなりの増加が見込まれている。このうち、最大の大豆生産国であるブラジルは、1億4900万トン（同19.2%増）と乾燥気候の影響により減産となった前年度から大幅に回復し、過去最大の生産量が見込まれている。また、生産量第2位の米国は、主要生産州での増産見込みから1億2628万トン（同4.6%増）、アルゼンチンもブラジルと同じく前年度からの回復を受けて5100万トン（同21.4%増）と見込まれている。さらに中国も、政策的に大豆生産を推進していることから、1750万トン（同6.7%増）と見込まれている。

輸出量は、世界全体で1億7001万トン（同9.3%増）とかなりの程度の増加が見込まれている。このうち、最大の大豆輸出国である

ブラジルは生産の回復から8850万トン（同6.9%増）、また、ブラジルに次ぐ米国も5987万トン（同2.8%増）といずれも増加が見込まれている。

輸入量は、世界全体で1億6712万トン（同8.2%増）とかなりの程度の増加が見込まれている。このうち、最大の大豆輸入国である中国は、ブラジルなどの輸出増加が見込まれる中で、国内需要の拡大から9900万トン（同7.6%増）と同じく増加が見込まれている。

消費量（搾油仕向け）は、世界全体で3億2676万トン（同4.2%増）と見込まれている。このうち、最大の大豆消費国である中国は、搾油向け需要の回復から9500万トン（同6.7%増）と増加が見込まれている。

この結果、世界の期末在庫は9960万トン（同16.8%増）と大幅な増加が見込まれている。期末在庫は、中国の大豆輸入需要の増加などを背景に南米などの生産拡大から上昇基調で推移してきたが、21/22年度は南米での減産から15/16年度以来となる8000万トン台に落ち込んでいた。

表 主要国の大豆需給見通し（2022年5月12日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区 分	2020/21年度	2021/22年度	2022/23年度	
		（推計値）	（5月予測）	前年度比 （増減率）
米国				
期首在庫	14.28	6.99	6.39	▲ 8.6%
生産量	114.75	120.71	126.28	4.6%
輸入量	0.54	0.41	0.41	0.0%
消費量	58.26	60.28	61.37	1.8%
輸出量	61.52	58.24	59.87	2.8%
期末在庫	6.99	6.39	8.43	31.9%
ブラジル				
期首在庫	20.42	29.40	21.36	▲ 27.3%
生産量	139.50	125.00	149.00	19.2%
輸入量	1.02	0.45	0.75	66.7%
消費量	46.68	47.50	48.75	2.6%
輸出量	81.65	82.75	88.50	6.9%
期末在庫	29.40	21.36	30.51	42.8%
アルゼンチン				
期首在庫	26.65	25.06	19.30	▲ 23.0%
生産量	46.20	42.00	51.00	21.4%
輸入量	4.82	2.20	4.80	118.2%
消費量	40.16	40.00	41.00	2.5%
輸出量	5.20	2.75	4.70	70.9%
期末在庫	25.06	19.30	22.10	14.5%
中国				
期首在庫	24.62	31.17	30.75	▲ 1.3%
生産量	19.60	16.40	17.50	6.7%
輸入量	99.76	92.00	99.00	7.6%
消費量	93.00	89.00	95.00	6.7%
輸出量	0.07	0.10	0.10	0.0%
期末在庫	31.17	30.75	31.56	2.6%
世界計				
期首在庫	94.66	99.91	85.24	▲ 14.7%
生産量	368.12	349.37	394.69	13.0%
輸入量	165.47	154.46	167.12	8.2%
消費量	315.08	313.68	326.76	4.2%
輸出量	164.51	155.57	170.01	9.3%
期末在庫	99.91	85.24	99.60	16.8%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注1：各国の穀物年度 米国：9月～翌8月／ブラジル、アルゼンチン、中国：10月～翌9月。

注2：消費量は搾油仕向量である。

（調査情報部 横田 徹）

米 国

2022/23年度の米国トウモロコシ生産者平均販売価格、12/13年度以来の高値予想

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）は2022年5月12日、22/23年度（9月～翌8月）最初の米国のトウモロコシ需給見通しを公表した（表）。

生産量は、5月中旬までの作付け遅れにより単収が前年度並みの見込みであることから、144億6000万ブッシェル（3億6730万トン^{（注1）}、前年度比4.3%減）と前年度の生産量をやや下回る見込みである。

消費量は、自動車のガソリン消費が横ばいとの見込みからエタノール向けが前年度並みである一方、飼料など向けがやや減少する影響を受けて、全体では121億6500万ブッシェル（3億900万トン、同2.2%減）とわずかに減少する見込みである。飼料など向けの

減少は、減産に加え生産者平均販売価格の上昇や家畜頭数の減少が主な要因であると考えられている。

輸出量は、先述の通り国内消費量はわずかに減少するものの、総供給量も減少することから、24億ブッシェル（6096万トン、同4.0%減）とやや減少する見込みである。一方で、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で世界的にも輸出量が減少し、活発な取引による高値相場が想定され、比較的単価の高い米国産のシェアは拡大する見込みである。

この結果、期末在庫は、13億6000万ブッシェル（3454万トン、同5.6%減）と前年度をやや下回る見込みである。

表 米国のトウモロコシの需給見通し（2022年5月12日米国農務省公表）

区 分	一単位一	2020/21年度	2021/21年度 (推計値)	2022/23年度		前年度比 (増減率)
				(5月予測)	参考(換算値)	
作付面積	(百万エーカー)	90.7	93.4	89.5	36.2 (百万ヘクタール)	▲4.2%
収穫面積	(百万エーカー)	82.3	85.4	81.7	33.1 (百万ヘクタール)	▲4.3%
単収	(ブッシェル/エーカー)	171.4	177.0	177.0	11.1 (トン/ヘクタール)	0.0%
生産量	(百万ブッシェル)	14,111	15,115	14,460	367.30 (百万トン)	▲4.3%
輸入量	(百万ブッシェル)	24	25	25	0.64 (百万トン)	0.0%
期首在庫	(百万ブッシェル)	1,919	1,235	1,440	36.57 (百万トン)	16.6%
総供給量	(百万ブッシェル)	16,055	16,375	15,925	404.51 (百万トン)	▲2.7%
国内消費量	(百万ブッシェル)	12,068	12,435	12,165	309.00 (百万トン)	▲2.2%
飼料など向け	(百万ブッシェル)	5,598	5,625	5,350	135.90 (百万トン)	▲4.9%
食品・種子・その他工業向け	(百万ブッシェル)	6,470	6,810	6,815	173.11 (百万トン)	0.1%
うちエタノール向け	(百万ブッシェル)	5,033	5,375	5,375	136.53 (百万トン)	0.0%
輸出量	(百万ブッシェル)	2,753	2,500	2,400	60.96 (百万トン)	▲4.0%
総消費量	(百万ブッシェル)	14,821	14,935	14,565	369.97 (百万トン)	▲2.5%
期末在庫	(百万ブッシェル)	1,235	1,440	1,360	34.54 (百万トン)	▲5.6%
期末在庫率	(%)	8.3	9.6	9.3		0.3ポイント減
生産者平均販売価格	(米ドル/ブッシェル)	4.53	5.90	6.75	34.3 (円/kg)	14.4%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注1：年度は各年9月～翌8月。

注2：1エーカーは約0.4047ヘクタール。

また期末在庫率（総消費量に対する期末在庫量）は9.3%（同0.3ポイント減）と前年度と同じく10%台を割り込む見込みである。

このような状況のもと、国際相場が上昇傾向にあることから、生産者平均販売価格も上昇が見込まれ、同14.4%高の1ブッシェル当たり6.75米ドル（872円。1キログラム当たり34.3円：1米ドル＝129.21円^{（注2）}）

と前年度からかなり大きく上昇し、12/13年度に記録した6.89米ドル以来の高値が予測されている。

（注1） 1ブッシェルを約25.401キログラムとして農畜産業振興機構が換算。

（注2） 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

（調査情報部 針ヶ谷 敦子）

中国

トウモロコシおよび大豆の価格動向

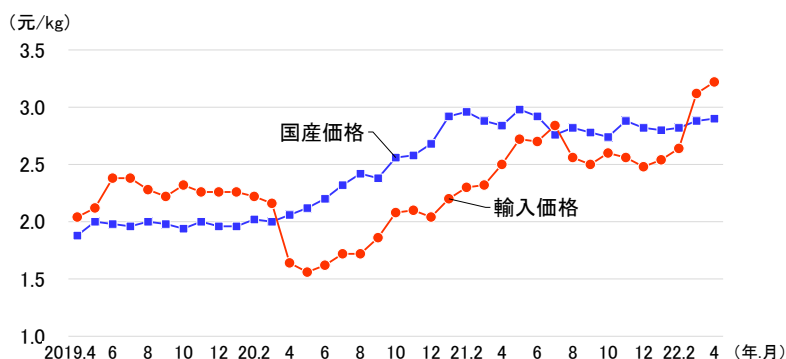
トウモロコシ、堅調な需要などから価格は上昇基調

中国農業農村部は5月25日、「農産物需給動向分析月報（2022年4月）」を公表した。この中で、2022年4月の国産トウモロコシ価格は、COVID-19の拡大による主産地の都市封鎖が徐々に解除されていることで、でん粉などを製造するトウモロコシ加工企業の生産が再開しつつあることから、前月からわずかに上昇に転じている（図1）。一方で、輸入トウモロコシ価格は、ウクライナ情勢を背景とした世界的な穀物価格の上昇を受けた

形で大きく反発している。また、短期的な価格動向として、豚の生産能力が引き続き高水準にある中で、同じく小麦価格の上昇からトウモロコシ代替飼料としての小麦の利用が減少し、トウモロコシへの需要回帰がより進むことで堅調に推移すると予想している。さらに、ガソリン価格や物流コストの上昇も、これを後押しするとしている。

主要養豚生産地である中国南部向け飼料原料集積地となる広東省黄埔港到着の輸入トウモロコシ価格（関税割当数量内：1%の関税＋25%の追加関税）は、22年4月が1キログラム当たり3.22元（63円：1元＝19.48

図1 トウモロコシ価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成

注1：国産価格は、中国東北部から広東省黄埔港までの運賃込み2級黄トウモロコシ価格。

注2：輸入価格は、米国メキシコ湾積出し2級黄トウモロコシの広東省黄埔港引渡し価格（関税割当数量内：課税後）。

円^(注)となり、同年2月から2割以上の上昇となっている。また、同月の国産トウモロコシ価格（東北部産の同港到着価格）同2.90元（56円）に比べて同0.32元（6円）高となり、3月以降、国産と輸入の価格は逆転している。

さらに、関税割当数量を超えた輸入トウモロコシ価格（65%の関税+25%の追加関税）は同5.20元（101円）と前月から同0.16元（3円）上昇し、国産トウモロコシとの価格差は同2.30元（45円）に広がっている。

国産大豆価格は安定、国際相場は高騰と予想

2022年4月の大豆価格について、需給の緩和とCOVID-19の防疫対策が厳しさを増す中で、業者による大豆の買い入れが低調となっていることで前月から変更はなかった（図2）。また、短期的な価格動向として、国内の大豆の需給や市場の取引も落ち着いた状況にあることで、高値ながらも安定的に推移すると予測している。一方で、米国農務省による直近の大豆需給見通しを踏まえ、ブラジルの大豆生産量の減少などから世界的な大豆需給のひっ迫傾向が続き、加えてウクライナ

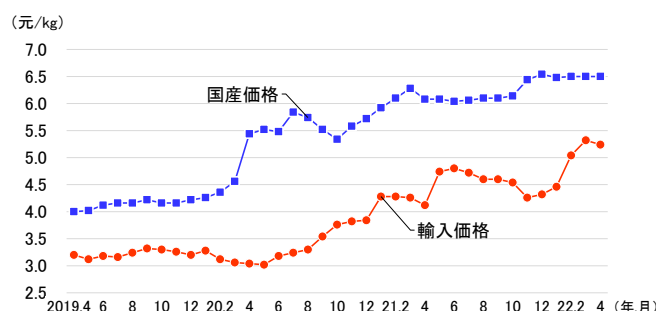
情勢や主産地での天候変動のリスク懸念などから、短期的には大豆の国際相場は高騰と予想している。

主産地である黒竜江省の搾油用向け国産大豆平均取引価格は、4月が1キログラム当たり4.98元（97円、前年同月比3.3%高）、同じく食用向け同価格は同6.12元（119円、同7.6%高）と前月並みながらも依然として前年に比べ高い水準にある。また、大豆の国内指標価格の一つとなる山東省の国産大豆価格は、同6.50元（127円、同7.0%高）と同じく高い水準にある。国産大豆価格と輸入大豆との価格差は、大豆国際相場の上昇などから縮小し、1キログラム当たり1.26元（25円）となった。

このような中で、国際相場上昇の影響などから大豆輸入量は減少に転じ、22年（1～3月）の輸入量は2029万トン（前年同期比4.1%減）となった。一方で、同期間の輸入総額は同20.7%増の123億3000万米ドル（1兆5932億円：1米ドル＝129.21円^(注)）と報告されている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年5月末TTS相場。

図2 大豆価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成

注1：国産価格は、山東省入荷価格。

注2：輸入価格は、山東省青島港引渡し価格（課税後）。

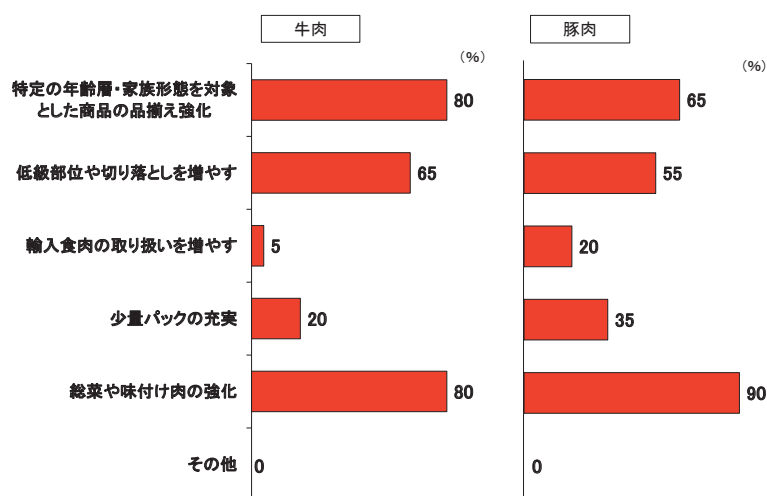
（調査情報部 横田 徹）

切り落としを増やす」となり、豚肉では1位が「総菜や味付け肉の強化」、2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、3位が「低級部位や切り落としを増やす」となった(図15)。

牛肉および豚肉のどちらについても、前回調査と比較して「総菜や味付け肉の強化」という回答が増加しており、COVID-19の影響による外食の苦戦や家庭での調理疲れなどを背景に時短・簡便商品の取り扱いを増やし、テーブルミート向けのさらなる拡大を目指していることがうかがえる。

また、販売拡大に向けた具体的な対応としては、「品揃えとして簡便、味付け商品の強化。また、売場展開として関連販売、メニュー提案を強化する」「ミールソリューション(味付焼肉)を強化し、簡便時短ニーズに対応した新商品を投入する」「外食・総菜が苦戦している中、味付け肉や簡便商品の品揃えを増やすことで売り上げにつなげる」「輸入品は仕入れ環境の悪化により供給が不安定なため取り扱いを縮小し、国産品にシフトする」などが挙げられた。

図15 販売拡大に向けた対応(量販店)



資料：農畜産業振興機構「食肉販売動向調査結果(2022年度上半期)」
注：複数回答。

(2) 食肉専門店

牛肉では1位が「低級部位や切り落としを増やす」、2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、3位が「総菜や味付け肉の強化」となった(図16)。3年度上半期では3位だった「低級部位や切り落としを増やす」が1位になったことから、食肉専門店では低価格の部位や切り落としの増加を、総菜や顧客の嗜好しこうに対応した品揃えの強化よりも重視している状況がうかがえる。

豚肉では1位が「総菜や味付け肉の強化」、

2位が「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」、3位が「低級部位や切り落としを増やす」となった。

販売拡大に向けた具体的な対応として、「安い商品を少量だけ買う顧客が多いので、1品の単価や量を増やす工夫をしたい」「和牛の内臓セットを扱い、部位ごとに分けて販売する」「コロナ禍によって消費者の低価格志向が助長されたので、できるだけ仕入方法を工夫し、価格を安定させたい」「和牛を中心に部位ごとのおいしさを認知してもらうために、部位ごとに特売を行う」などが挙げられた。